

第28回

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

一般財団法人 国際開発機構 FASiD

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。第28回(2024年度)の受賞作品が決定しましたのでご紹介します。

中国開発学序説

非欧米社会における学知の形成と展開

汪牧耘

WANG Muyun



脱中心的な開発学へ

かつての植民地支配や冷戦下の対外政策を歴史的背景として、欧米諸国による国際開発・援助事業を主に理論化してきた開発学は今、転換期を迎えている。経済成長により支援される側から支援する側へと転じた中国は、国際社会を結び直す開発学を打ち立てられるのか。中国における開発実践と学知形成の過程を辿り、新時代の開発学を展望する。

法政大学出版局 定価(本体4,500円+税)

汪牧耘 著

『中国開発学序説 非欧米社会における学知の形成と展開』
(法政大学出版局) 2024年

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著 『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
- 原 洋之介著 『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著 『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
- 深川由起子著 『韓国・先進国経済論 -成熟過程のミクロ分析-』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著 『中国経済発展論』有斐閣 1999年
- 辻村英之著 『南部アフリカの農村協同組合 -構造調整政策下における役割と育成-』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著 『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著 『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
- 西川 潤著 『人間のための経済学 -開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著 『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
- 脇村孝平著 『飢饉・疫病・植民地統治 -開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著 『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著 『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
- 安原 毅著 『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 藤田幸一著 『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動:貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著 『村の暮らしと砒素汚染 -バングラデシュの農村から』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著 『牧畜二重経済の人類学 -ケニア・サンブルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著 『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著 『現代アフリカの紛争と国家 -ポストコロナル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009年
- 第14回 田辺明生著 『カーストと平等性 -インド社会の歴史人類学』東京大学出版会 2010年
- 第15回 該当作なし
- 第16回 佐藤百合著 『経済大国インドネシア -21世紀の成長条件』中央公論新社 2011年
- 第17回 森 壮也・山形辰史著 『障害と開発の実証分析 -社会モデルの観点から』勁草書房 2013年
- 山尾 大著 『紛争と国家建設 -戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』明石書店 2013年
- 柳澤 悠著 『現代インド経済 -発展の淵源・軌跡・展望』名古屋大学出版会 2014年
- 第19回 古川光明著 『国際援助システムとアフリカ -ポスト冷戦期「貧困削減レジーム」を考える』日本評論社 2014年
- 第20回 宮城大蔵編著 『戦後日本のアジア外交』ミネルヴァ書房 2015年
- 第21回 田中由美子著 『「近代化」は女性の地位をどう変えたか-タンザニア農村のジェンダーと土地権をめぐる変遷』新評論 2016年
- 佐藤 仁著 『野蛮から生存の開発論 -越境する援助のデザイン』ミネルヴァ書房 2016年
- 第22回 堀江未央著 『娘たちのいない村 -ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会 2018年
- 第23回 友松夕香著 『サバンナのジェンダー -西アフリカ農村経済の民族誌』明石書店 2019年
- 第24回 谷口美代子著 『平和構築を支援する -ミンダナオ紛争と和平への道』名古屋大学出版会 2020年
- 第25回 下條尚志著 『国家の「余白」-メコンデルタ 生き残りの社会史』京都大学学術出版会 2021年
- 下村恭民著 『日本型開発協力の形成 -政策史1・1980年代まで』シリーズ「日本の開発協力史を問います」1 東京大学出版会 2020年
- 第26回 工藤晴子著 『難民とセクシュアリティ-アメリカにおける性的マイノリティの包摂と排除』明石書店 2022年
- 第27回 寺内大左著 『開発の森を生きる -インドネシア・カリマンタン 焼畑民の民族誌』新泉社 2023年

審査委員選評

本書は、世界的に注目されている中国の国際開発を、同国における「開発学」の形成過程に焦点を当てて論じた初めての書籍である。筆者は、中国政府が欧米からの中国の開発手法に対する批判を受けて、新たな国際開発研究機関設立などにより自国の開発経験の理論化を目指すようになった近年の動向に注目する。中でも、中国農業大学を中心とする中国の研究者たちが、経済協力開発機構(OECD)開発援助委員会(DAC)との交流などを契機に、欧米の開発学を吸収し、中国独自の開発学創出を模索しながら開発言説の普遍化に取り組み始めた経緯を丹念に描いている。

中国やラオスでのフィールドワークを通じた考察は一読に値する。中国農業大の中国農村部の貧困削減事業で、生活改善に繋がるのであればなんでも動員するやり方を観察した筆者は、中国の開発学の特徴について、「あるべき開発」を求めるのではなく、現実的に「ある・ありうる開発」の議論を重視している点を挙げる。一方で、中国政府のラオスでのプロジェクトでは、中国の研究者が提起した開発言説である、自らの開発経験をありのままに途上国と対等の立場で共有する「平行経験」は、現場レベルの実践とは距離があることを指摘している。

中国政府は、従来のインフラプロジェクトに加えて、途上国の人々に直接的に裨益する貧困削減など「小規模でも効果の高い」プロジェクトにも力をいれ始めた。中国の開発学はこうした取組みに理論的根拠を与える可能性を持っており、本書は、今後の中国の国際開発のあり方を検討する上で有用な知見を提供している。

日本の開発学の歴史を概観し、中国の研究者がどのように評価しているかについての分析を行っている点も興味深い。筆者の、日本の国際開発を言語化・概念化する試みは少ないといった指摘は傾聴に値する。大来賞の歴史の中で海外研究者による初の受賞となる。本書は時宜を得た出版であり、国際開発研究大来賞にふさわしい作品である。(北野 尚宏)

受賞者の言葉

大来佐武郎の生誕110周年の年に、その名を冠した賞を戴くことをとても嬉しく思っております。日本戦後史において、「世界人」と振り返られる大来が、何を「国際」とし、いかなる「開発」を想像していたのか。1970年代に始まる日中経済知識交流会をはじめとする両国の知的往来を追う過程で、大来が架け橋となった国際開発の現場に思いを馳せることは少なからずありました。中国からの留学生として来日した私にとって、それは、異なる時代を貫いた越境者の気概に触れ合うことであり、両国の狭間を生きる自らの足元を見つめ直すことでもありました。本書は、2022年度に東京大学に提出した博士論文をもとに執筆いたしました。大来が見届けられなかった1990年代以降の中国で生まれ育った私の関心は、中国の経済を成長させるための開発というよりも、中国と国際社会を繋ぎなおす核心的な現場としての開発に向けられてきました。中国の海外進出は賛否両論を呼んでいます。そもそも中国における「開発」概念はどこから来たのか、中国の国際開発は一つの知的現場としてどのような可能性を持ちうるか——こうした問題意識に応える方法として、本書は開発学という言説空間に着目し、中国における国際開発の学術研究の形成と変遷を文献調査とフィールドワークから明らかにすることを試みました。それを通して見えてきたのは、中国の開発経験が、実は国境を跨ぎながら他国と絡まり合っていることです。その同化でも対立でもない関係性は、今日の国際開発を検討する上でも有益な手がかりになっていると考えます。

法政大学出版局の担当編集者が、本書の原稿を読んで「珍獣発見」という感想を漏らしたように、本書を特定の学問の系譜に位置づけ評価することの難しさは私自身も感じてきました。そうした中、「大来賞」という歴史ある賞をいただき、特定のディシプリンに強く依らずとも開発への探究を受け止めていただけたことを心強く感じています。本書は正体をつかみ切れない中国開発学の輪郭を描こうとする試みにすぎませんが、国内外の現場で「より良い生」の在り方を模索される方々、そして様々な学問分野の知見を横断しながら国際開発研究に真摯に取り組もうとする方々に向けて、それぞれの挑戦への小さな励みとなれば嬉しいかぎりです。

日本に留学して以来紡いできた国際開発への問いは尽きることがありません。それは今、アジアにおける国際開発知の変転と環流へ、そしてその実践者である自分自身へと深まりを見せています。中国で生まれた「開発」概念は、その誕生時には「内発的な力を引き出し、本来の状態に成る・戻る」という意味を持っていました。この当初の意味合いを考えると、中国の大学で漢方薬を学んでいた私が十年前に日本へ渡り、今ここに至る道のりは、図らずも一つの「国際開発」の物語のように思えます。それは、留学を通して引き出された自らの可変性に気付く過程であると同時に、豊かさや先進性にまつわる強迫観念を、研究を通じて相対化し、本来の自由闊達な精神を取り戻す旅路ともなっています。

大来佐武郎をはじめとする先人たちが、それぞれの時代と真摯に向き合ったように、私もまた、自らの問いかけの赴くままに新たな地平を切り拓いていきたいと願っています。末筆ながら、この道のりを見守り続けてくださった恩師、心友、家族に、心からの感謝を捧げます。

汪牧耘



おう・まきうん / WANG Muyun

東京大学東アジア藝文書院特任助教。博士(国際協力学)。修士(国際文化)。東京大学東洋文化研究所特任研究員を経て、2024年4月より現職。専門は開発学、対外援助研究。「より良い生」をめぐる感覚・記憶・言説の知識化に関心があり、特に中国や日本における国際開発論の系譜を歴史資料と現地調査から浮き彫りにすることを試みている。

主要著書・論文

“The Trinity of Aid, Trade, and Investment: The Reemergence of a Japanese-Style Development Term as China Rises.” (*The Semantics of Development in Asia: Exploring 'Untranslatable' Ideas Through Japan*, Jin Sato and Soyeun Kim (eds.), Springer, 2024年)。「中国における国際開発研究の受容と展開：脱『欧米中心主義』の可能性の一考察」(『アジア経済』64(3)、2023年)。「『開発=开发(カイファー)』の意味変容と概念形成：日中における言葉の借用を中心として」(『国際開発研究』29(1)、2020年)など。

第28回

応募作品の傾向と選考経緯

2023年4月から2024年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ、46作品の推薦・応募があった。

複雑・対立の激化する国際情勢を背景に、安全保障を直接テーマにした作品を含めてアジア地域を対象とした作品が過半を占めた。そこには中国を対象とした研究書を6作含んでおり、また今期応募・推薦作品には中国系研究者によるハイレベルな作品群が存したことが強く印象に残り、今年の特徴であった。

FASID国際開発研究センターにおいて予備審査を行い、受賞作に加えて下記4作を最終審査対象として選出した。

今年の推薦・応募作品について審査過程における委員による意見はおおよそ以下のとおりである。（書名五十音順）

『国家を補完するガバナンス－保健、教育、ジェンダー平等におけるラオス女性同盟の役割』（佐藤 敦郎、明石書店）
脆弱国で開発のためのガバナンスをいかに強化するかは中心的課題である。同著では国家機能だけでなく、社会に根差した組織や仕組みが果たす役割に注目していく意義を指摘し、具体的に協働型・社会的ネットワークという2つの機能を明らかにしたことは重要で、学術性のみならず実践面でも意義ある貢献といえよう。

『社会的企業の挫折－途上国開発と持続的エンパワーメント』（一柳 智子、名古屋大学出版会）
「営利型社会的企業の営利企業化への変化」という形での「失敗」に目を向けたことによって、営利型社会的企業の存続の可能性・条件を抉り出すことができている。もてはやされがちな「社会的企業」の持続性における「社会的コスト」を誰がどう負担するかという問題提起は重要であり、ソーシャルビジネス関連講義の参考文献としても有用である。

『日本の国連外交－戦前から現代まで』（潘 亮、名古屋大学出版会）
加盟から冷戦終結までの日本の国連外交の約45年間を、公開された外交文書を丹念に読み解いた恐らくは初めての通史である。著者が10年かけて書き下ろした大著であり歴史研究としても優れ、学術的に高い水準に達しており国連研究に限らず、外交研究者にとっても貴重な作品である。大学図書館なども需要があろう。

『日本の難民保護－出入国管理政策の戦後史』（土田 千愛、慶應義塾大学出版会）
国際的に「難民鎖国」と言われてきた日本の難民政策の変遷とその背景（国内事情、政策形成過程）を明らかにしたことで、関係実務者にとってより広い視野を提供している。難民・移民など、国外から日本への流入者に対する政策のあり様について考えるには時宜を得ており、本書のテーマに関心のある読者層は多いと思われる。

【第28回（2024年度）審査委員会】

- 委員長 杉下 恒夫（FASID 理事長）
委員 絵所 秀紀（法政大学比較経済研究所客員研究員）
大野 泉（政策研究大学院大学名誉教授客員教授）
北野 尚宏（早稲田大学理工学術院国際理工学センター教授）
滝澤 三郎（東洋英和女学院大学名誉教授 ケア・インターナショナル・ジャパン 副理事長）
朝戸 恵子（FASID 専務理事）

表彰式・記念講演会

ご案内（Zoomによるオンライン配信）

2025年1月15日（水） 13：00～（2時間程）

講演タイトル「開発学はいかにあるか－中国にみる非欧米社会の知的可能性」

汪牧耘

経済的な台頭だけでなく、知的生産者として台頭した中国は、植民地支配や冷戦下の対外政策という歴史的文脈の中で形づくられてきた開発学に転換をもたらそうとしています。果たして中国は、従来の「東/西」「南/北」の二項対立を超えた、批判的かつ多面的な開発学を構築できるのでしょうか。本講演は、中国における開発学の言説形成を辿ることで、アジアで学び育った一人としての視座から国際社会を紡ぐ知を非欧米社会から発する可能性を展望します。

会場 ハイブリッド式 オンラインzoomによる参加者のみ募集します
（感染症対策等により、オンライン配信のみとなる場合がございます）

くわしくは https://www.fasid.or.jp/okita_memorial_prize/3_index_detail.php

参加無料・要申込み オンラインフォームからお申込みください

締切 2025年1月8日（水）正午 定員60名程（定員に達した時点で受付を終了します）

お問合せ FASID国際開発研究 大来賞事務局（服部） email: okita@fasid.or.jp / Tel: 03-6809-1997

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

受賞候補作品 募集のご案内

「国際開発研究 大来賞」は、国際開発の分野における研究奨励と促進、良書の発掘に資するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。

第29回(2025年度)についても、みなさまからのご推薦・ご応募をお待ちしております。

対象となる作品

- (1) 開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとする日本語の研究図書(翻訳、随筆、エッセイ、体験記、自伝、紀行文、事業報告書等を除く)であって、国際開発の実践活動の向上に資するもののうち、特に斬新性、普及性の点で顕著な業績、貢献が認められるもの。
- (2) 個人又は団体が編者あるいは著作者の場合は、個人の執筆者名が明記されているもの。
- (3) 2024年4月から2025年3月までの間に、初版が国内で市販されたもの。

大来 佐武郎(おおきた さぶろう)氏

1914年旧満州大連市に生まれる。1937年東京帝国大学工学部卒業、逓信省入省。戦後は経済安定本部、経済企画庁においてエコノミストとして活躍。1963年に同庁総合開発局長退官、1964年日本経済研究センター理事長就任、南北問題や開発援助分野で活躍。国際開発計画委員会(ティンバーゲン委員会・ピアソン委員会)の委員や『成長の限界』を刊行したローマクラブのメンバーを務める。1971年国際開発センター理事長、1973年海外経済協力基金総裁などを歴任し、1979年の大平政権において外務大臣を務める(～80年)。その後も国際大学学長、対外経済問題諮問委員会座長、FASID初代評議員会会長、国際開発学会会長等、国際開発分野で数多くの足跡を残す。1993年逝去。

審査・表彰

表彰 審査委員会で選考された作品に対し、正賞(楯)と副賞(50万円)を贈呈します。

審査 当財団国際開発研究センターによる予備審査を経て、審査委員会が行ないます。

推薦・応募

推薦者(自薦・他薦可)は、所定の「推薦書」へ入力し、email添付にて送信とともに、当該図書2冊を添えて応募・推薦してください。なお、推薦書類・当該図書は返却しませんのであらかじめご了承ください。

締切 2025年5月末

受賞作品の発表と表彰式

2025年11月に推薦書で指定先へ通知、発表し、表彰式を行います。

推薦書ダウンロード・推薦・お問合せ先

下記事務局へお送りください。

https://www.fasid.or.jp/okita_memorial_prize/2_index_detail.php

一般財団法人 国際開発機構

国際開発研究大来賞 事務局(服部)

email: okita@fasid.or.jp / TEL: 03-6809-1997

本事業には公益財団法人 三井住友銀行国際協力財団による助成を受けています。

一般財団法人 国際開発機構

国際開発研究センター

国際開発研究 大来賞 事務局(服部)

〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-18-19 UD神谷町ビル10階

email: okita@fasid.or.jp TEL: 03-6809-1997 FAX: 03-6809-1387 <http://www.fasid.or.jp>